
愛と哀しみのラストショー

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛と哀しみのラストショー

【Zコード】

Z9035A

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

夏の避暑地で暮らす少年。彼が出会った白い服の少女はそのまま少年と恋に落ちる。けれど少女は少年に嘘をついていた。その嘘が最後に。 チェツカーズシリーズ第十一弾です。初期のバラードの名曲です。

愛と哀しみのラストショー

「馬鹿だね。泣くなよ」

俺は笑つてそう言つた。あいつはそれでも泣くのを止めなかつた。波音が遠くから聞こえてくる。俺はこの時駅に一人でいた。そして去つていく電車を見送つていた。

儂い思い出だつた。一夏の。俺はこの夏恋に落ちてそして失恋した。ほんの一時の思い出だつた。

俺は生まれた時からここに住んでいる。海辺にある避暑地だ。湖もあつてその側で暮らしている。多分ずっとここに暮らしていくことだらう。

夏になればここは避暑にやつて来た金持ちや観光客で賑わう。軽井沢みたいなものだ。俺の家もそうした金持ちや観光客を相手にして暮らしている。そしてあの時も俺は店で親の仕事を手伝つていた。夏休みがはじまつたばかりで忙しくなつてきた頃だつた。俺は親に言われて店の前を掃除していた。その時目の前をあいつが通り掛かつた。それがはじめてだつた。

白いワンピースに白い帽子を被つていた。その後ろに見える青い空が白い服によく合つていた。あいつはそこで明るく笑つていた。まだ日に焼けていない白い顔で。明るく笑つていた。

その時はよくいる観光客の一人だと思つた。夏になるとそうした格好の観光客で溢れ返る。だから一々そんなことに構つてはいられなかつた。けれどその黒くて長い髪と大きな黒い瞳が印象的だつた。まるで漫画に出て来るみたいな感じだつたのをよく覚えている。

それから一二三日経つて俺は海にいた。連れと一緒にいい女を探していた。

「誰かいないかな」

俺達はジーンズにシャツを着てサングラスをかけていた。ラフな

格好で好みの女を探していた。

見つけたら後は声をかけるだけだ。地元だから案内すると言つてそのまま仲良くなる。まあ地元に住んでいる特権だった。これで毎年いい思いもしている。

それでこの日もいい思いをするつもりだった。けれどそこであいつにまた会つた。

「あつ」

あいつを見て思わず声を出しちまった。サングラスの向こうに白いワンピースの水着のあいつがいた。海辺でもあいつは白だった。「どうかしたのかよ」

連れは俺の声を聞いて声をかけてきた。

「急に声なんか出してよ」

「いや、何でもねえよ」

俺は咄嗟に誤魔化した。

「ちょっとな」

「可愛い娘ちゃんでも見つけたのかよ」

「馬鹿、そんなんじやねえよ」

俺は怒ったような声を出してまた誤魔化した。

「じゃあ何なんだよ」

「何でもねえよ」

そう言つて海辺から立ち去つた。けれどあの姿が余計に目に入つた。その日はそれが忘れられなかつた。寝るまで海辺でのことと店の前でのことが頭の中で浮かびっぱなしになつた。

次の日俺は店がはじまるまで湖の方へ行つた。何か起きててもあの白い服が好きなことが忘れられなかつたからだ。何かぼんやりとした気持ちでどうにもいたたまれなかつたからだ。

俺はそうした時や落ち込んだ時よく湖の方へ行つた。そこへ行くと何か落ち着くのだ。そして落ち込んだ気持ちも幾分ましになるからだ。

この時もそうだった。頭の中があの女のことで一杯でどうにもならない。

らない。そんな頭の中をましにしたかったのだ。俺は自転車で湖まで行った。

そこは周りが森に包まれた静かな場所だ。岸辺には草が生い茂りボートも置かれている。ここでもとびきりのいい場所だ。観光客も殆ど来ない。だから俺は何かあつたらいつもここに来る。誰にも邪魔されたくはなかつたからだ。

自転車から降りた。鍵だけ抜いてふらりと湖の方へ行く。岸の方へ行こうと思った。あそこが一番好きだからだ。

まだ日差しも強くなかつた。朝の露が草に残つてきらきらと輝いていた。蜘蛛の巣の糸も露で銀色に光つてこの時ばかりは綺麗だ。森からは虫の鳴き声が静かに聴こえてくる。俺はその声を聴きながら岸に向かつて歩いていく。ボート乗り場のところまで行った。するとそこにあいつがいた。最初に会つた時と同じ白いワンピースに白い幅の広い帽子を被つていた。俺に背を向けて湖の方を見ていた。髪が風に微かに揺れ動いていた。

「またあいつか

俺はそれを見て心の中で呟いた。

「これつて何かの縁なのかな」

そう思わずるを得なかつた。これで会つたのは三度目だからだ。そして俺の心の中のもやもやとしたものはまた大きくなつた。ここに来ればそれが晴れると思ったのにとんだ見当違つた。けれど同時にどういうわけか笑いたくなるものがあつた。

「なあ」

俺は声をかけた。

「どうしたんだい、こんなところで」

あいつはそれに釣られて顔を俺の方に向けてきた。あの黒くて大きな目で俺を見ていた。

「こんな人気のない場所で

「ちょっとね」

あいつは俺の言葉に応えてうつすらと笑つた。

「久し振りにここに来たかい」

「久し振り？」

俺はその言葉にふと興味を覚えた。

「前にもここに来たことがあったのかい？」

「ええ、子供の頃に」

あいつは湖の方へ顔を戻して俺に言った。

「もう。殆ど覚えていないけれど」

「そうだったのか」

旅行か避暑で来たのだろうと思つた。ここに来る奴は皆そうだからだ。

「で、覚えている限りじゃどうなんだい？」

俺は尋ねた。

「変わったかい？」

「いえ、全然」

首を横に振つてそれを否定した。

「子供の頃だつたから殆ど覚えていないけれど」

そう断つたうえで言つ。

「覚えているのと全然変わらないわ」

「まあそうだろうな」

俺はその言葉に頷いた。

「ここには。昔から全然変わっちゃいねえよ」

「そうなの」

「ペンションがあつて喫茶店があつて」

俺は言つた。

「海があつて。そしてこの湖があつてな」

何も変わっちゃいない。俺が生まれた時からずっとここにいた姿だ。夏は人が多いがそれでも静かな避暑地だ。

「何も変わりはしないさ。ずっとな」

「だからボートもあるのね」

「まあな」

ポートも。昔からあった。

「そのままで。ずっとな」

「そうみたいん。よかつたわ」

「よかつた?」

「久し振りにここに来たから」

そしてまたこいつ言つた。

「変わつてなくて。嬉しいの」

「そりゃ」

何かそりうつのが不思議に思えた。俺ひとつやけでどうでもこっこ
とだからだ。こじが変わつても変わらなくとも家の商売が傾かなければ
それでよかつた。そうしたところは親父やお袋と同じ考えだつ
た。

「今度ここに来る時は」

「今度は?」

「つうん、何でもないの」

どういうわけかこじでまた首を横に振つた。その理由はこの時は
わからなかつた。それから徐々にわかつってきたことだつた。

「何でも。ところで貴方ここの人なの？」

「ああ」

俺は素直にそれに答えた。

「ずっとな。ここで親が店やってるんだ」

「そうなの」

「学校もここの中学校だ。今は休みだけれどな

「そうよね。私も」

こいつもそれに答えた。

「大学の。最後の夏休みなの」

「だったら俺と同じか」

同じ歳らしい。俺も今年で大学を卒業だ。卒業したら家業を継ぐことになっている。やることは結局変わりはしねえ。ここですっと店をやるのが俺の人生なんだと思っている。

「貴方もそうなの」

「ああ。けれど俺はずつとここにいるけどな」

「私は。一夏だけ」

笑いながら言った。

「ここにいるわ」

「遊びに来たんだな」

「そうよ。少しの間だけね」

「それじゃその間さ」

この時こう言わなかつたら何もなかつただろう。俺のもやもやとした気持ちはそのままだつたかも知れないが。それでも何もなかつたと思つ。

「一緒に遊ばないか」

「一緒に?」

「ここのこと殆ど覚えていないんだろう?」

「ええ」

帽子を被つたままこくりと頷いた。

「本当に。何処に何があるのか殆ど」

「ここにはどうして来たんだい？」

「たまたま。歩いていて」

どうやら俺とここで会つたのは偶然だつたらしい。前の二回も完全に偶然だつた。俺達は偶然三回も会つてしまつた。本当に何かの縁だとしか思えなかつた。

けれどそれがかえつてよかつた。俺にしても何か気が楽だつた。俺は軽い調子でまた声をかけた。

「ボートにでも乗る？」

「ええ」

彼女は頷いた。

「よかつたら」

「それじゃあ乗ろうぜ」

そのまま乗り場の方へ案内していく。もう歳をとつた爺さんが座つてそこで待つてゐる。ボートが何艘か並んでいた。

爺さんに小銭を渡して先頭にあつたボートに一人で乗る。俺達は向かい合つて座つた。彼女は座ると帽子をとつて自分の膝の上に置いた。

俺は漕ぎはじめた。そしてゆつくじと岸辺から離れていく。そのまま湖の真ん中へと進んでいく。

「広い湖ね」

彼女は周りを見渡しながら言つた。まだ朝もやが残つてゐる。

「ここに隠れた名所なのさ」

俺は笑つてこう応えた。

「観光客はあまり来ないけれどな」

「そうなの」

「皆海や店に行つちまうから」

「そつちの方が賑やかだからね」

「ああ。けれど、いつした場所もあるんだ。
俺はボートを漕ぎ、続けながら言った。

「静かに楽しめる場所もな。これは覚えてないかな」

「ええ、

彼女は申し訳なさそうに答えた。

「悪いけれど、

「別に悪くなんかなこと？」

俺はそう返してフオローラーした。

「忘れてたんならな、

「有り難う、

彼女はその言葉に礼を言つてくれた。

「そう言つても、うるさいと、『が』が樂になるわ、

「やうかい、

「『』の夏は『』でも、いつとしたいから。少しずつ、『』に出て、『』

「それがいいだらうな、

俺は『』で、ボートの縁に刻まれた傷に目がいった。

「おや、

「どうしたの？」

「いや、これな、

俺はその傷を指し示して言つた。

「どつかの馬鹿が付けた傷だよ、

「傷？」

「ああ。何か書いてあるな、

俺は漕ぐのを止めて縁を見てみた。そこにはまた臭い文字が書かれていた。

「俺達はずつと一緒だつてや、

俺は読みながら思わず笑ってしまった。

「また臭い言葉だよな、

「ずっと一緒に」

「どうせどっかの馬鹿が得意になつて刻み込んだんだらつた。彼女と一緒にいて」

「彼女と」

「ここじゃよくあることなんだよ」

俺は説明した。ここは避暑地だから夏のちょっとした遊びに来るカップルも多い。それで「うした馬鹿な」とをする奴もいる。それがこれだつた。

「よくあることなんだ」

俺はまた言った。

「俺達地元の人間にとつちや迷惑だけれどね」

「そうなの」

「ああ。まあ慣れたけれどね」

それは本当だつた。俺も子供の頃からこんな落書きとかを一杯見てきた。慣れるのも当然だつた。

「けれど。何か」

「何だい？」

俺は彼女に尋ねた。

「地元の人の前でこんなこと言つていいかどうかわからぬけれど」

「ああ」

「悪い気はしないわ。見ついて」

「俺も慣れてるけれどね」

また言った。

「けれどな。何か」

それでも俺は言つうだつた。けれどそれは途中で止めた。

「いや、いいや」

急に言つたくなくなつた。

「どうでもな」

「そうなの」

「まあこんな馬鹿な落書きなんて忘れてこの湖を見てこいつよ

俺はこう提案した。

「そつちの方がいいしむ」

「ええ」

けれどその落書きのことは頭に残った。そして俺達のことにそれを自然と重ね合わせた。

それが凄く自然に思えた。不自然な筈なのに。俺は段々それがわからなくなつてきていた。けれど悪い気はやっぱりしなかつた。もやもやとした気持ちが自然にすつきりとして穏やかで、それなのに温かい気持ちになつっていくのがわかつた。それが本当に自然だつた。

それから俺達は毎日みたいに会つようになった。俺の店に来ることもあれば教えてもらつた彼女の白い別荘まで。そこは本当に俺なんかとは住んでいる世界が違う大きな別荘だった。こうした別荘も昔から見ているがそれでも驚いた。まさかこんな別荘を持っている女の子と付き合うなんて夢にも思わなかつたからだ。

「いらっしゃい」

彼女は俺を別荘の中に案内するとあの白い服で出迎えてくれた。

「あ、ああ」

俺はその別荘に来て凄く戸惑つていた。

「何か。凄い別荘だね」

辺りをキヨロキヨロと見回しながら言つ。

「驚いた？」

「まあな」

俺は素直に答えた。

「こんな凄い別荘にいるとは正直思つてなかつたから」「言つたのに」

「けれどさ」

それでも驚くものは驚くものだ。

「実際に見てみると」

「驚くことないのに」

彼女は優しく微笑んでこいつ言つた。

「今は私の家なんだから」「君の？」

「ええ、この夏だけはね」

彼女は言つた。

「私の家の」

「そうなんだ」

「そして私の家であるのはこの夏だけなの」

「どうしてなんだい？」

「うん、ちょっとね」

「ここで彼女は何かを言おうとした。けれどそれを止めてしまった。

「いえ、何でもないわ」

「何だよ、つれないな」

「御免なさい。それよりあがる？」

「よかつたら」

「それじゃあばあやにお茶を入れてもらつから。リビングに行きましょう」

ばあやときたものだ。どうやら本当にお嬢様らしい。少なくとも俺なんかとじや住んでいる世界が全然違う。そうした人は一杯見てきたがこいつして付き合つのは本当にはじめてだつた。だから余計に戸惑つた。

リビングに案内してもらつとこにもまた白くて綺麗な部屋だつた。外も白くて綺麗だつたけれどこにもそれは同じだつた。何か本当に別世界にいるようだつた。

俺は何か居心地が悪くなつてきた。俺みたいのがいる世界じゃないと思つたからだ。けれど彼女はそんな俺ににこりと笑つて言つてくれた。

「お菓子も出すわね」

「あ、ああ」

出て来たのはケーキだつた。生クリームに苺やオレンジを飾つたまた女の子らしいケーキだつた。ケーキが出て来たとこでそのばあやさんがお茶を持って来てくれた。

「どうぞ」

出されたのは紅茶だつた。そして同時に熱いミルクもあつた。

「ロイヤルミルクティーだね」

「ええ」

これはわかつた。俺の家は喫茶店だ。だからこのロイヤルミルクティーも知っていた。何から何まで白かつた。夏の暑い日差しも空気も涼しく感じられる程だつた。

飲んでみた。俺の店で出すのよりもずっと美味かつた。ケーキもだ。素材がいいだけじゃない。作り方も煎れ方もそいじょそいいらのなんて比べ物にならない程だつた。

「どうかしら」

「いや、これは」

正直喫茶店の人間としちゃ複雑な気持ちだつた。

「美味しいよ」

けれど素直にこつ答えた。ここまでいいケーキや紅茶なんてそういうからだ。悔しいがそれは認めるしかなかつた。

「とても」

「そう、よかつたわ」

彼女はそれを聞いて顔をほころばせた。

「喫茶店の人だから。何て言われるかわからなかつたのよ」

「うちの店のより美味しいよ」

俺は言った。

「こんな紅茶もケーキもそうそうないから」

「そうかしら」

「そうだよ」

俺はまた言った。

「ここまで美味しいのは。そうはないよ」

「ふうん」

だが彼女はそれがよくわかつていないようだつた。

「そうかしら」

「舌が慣れてるのかな」

俺はそう思った。

「だから。案外わからないのかも」

「私はそうは思わないけれど」

けれど人間なんてのは自分のことは案外わからないものだ。彼女もさうかも知れない。

「けれど嬉しいわ。うちのお茶やケーキが美味しいって言つてくれて」

「それはどうも」

「飲んで。まだあるから」

「うん」

俺達はお茶とケーキ、そしておしゃべりを楽しんだ。本当に何か違和感があつたけれどそれも次第になくなってきた。そういうことが何回かこの別荘でも俺の店でもあった。俺達はどんどん親密になつていた。

「なあ」

俺は浜辺で遊んでいた時に彼女に言つた。

「来年もここに来るかな」

「それは」

彼女はそれを言われると一瞬戸惑つた顔を見せた。

「どうかな。何なら俺の方からそつちに行くけれど俺はさらりと言葉を続けた。

「またさ。一緒にいようよ」

「この夏だけじゃなくて?」

「そうさ」

俺は答えた。

「また来てくれよ。それがずっとここに」

「ええ」

けれどそれに答える彼女の顔は何処か寂しげだった。

「いてくれないかな

「よかつたら」

彼女は力ない声で答えた。

「ずっと一緒にいたいけれど」

「実際はそうはいかないよな

「ええ」

「ここは避暑地だから。夏が終われば皆出て行くしな」

それが現実だった。それは俺にもわかっている。けれどそれでも夢は見たいものだ。この時の俺がそうだった。一夏でもいい、夢を見ていられるのなら。それでよかつた。けれど現実ってやつは俺が思っていたよりずっと冷たくて残酷なものだった。

「まあ、そうはいかないものだよな」

「そうなのよね」

彼女は力ない声で頷いた。

「どうしてもね」

「そうだよな。本当にどうにかならないものかね」

俺もこう思つた。

「それでもさ。一緒にいようぜ」

俺は言った。

「いいかな、それで」

「え、ええ」

ここで俺は彼女の様子に気付くべきだった。そうすればあんなことにならなかつたからだ。今更言つてもどうしようもないことだとしてもだ。

「とりあえず夏だけはね」

彼女は俺に顔を向けて言つた。

「一緒にいましちょう

「ああ」

こうして俺達は「一人きりの夏を過い」した。他には何もいらなかつた。ただ彼女だけがいればよかつた。本当に一人だけで充分だつた。彼女さえいれば。

砂浜も湖も海も森も。全てが俺達と一緒にだつた。楽しい夏だつた。そこには青春があつた。

俺は今まで青春なんて感じたこともなかつた。夏になれば店を手伝い、それ以外はただ漠然として学校に通つていて。それだけだつた。その味気ない日々に彼女が来てくれた。はじめて青春つてやつを知つた。嬉しかつた。俺はずつとこうしていたかつた。

けれど青春つてやつは夢に似ていると誰かに聞いた言葉をここで思い出すことになつた。夏が終わりそうになるその時だつた。彼女に家に行くと手紙がポストに入つっていた。

俺はそれはとりあえずはチラリと見ただけだつた。他人の手紙なんて見るもんじやない。余計なトラブルを抱える羽目になりかねない。だから俺はその手紙はそのまま素通りした。そして彼女の家に入つた。余計なことは言わず彼女自身にその手紙のことを伝えた。

「手紙が来てるぜ」

「手紙が？」

「ああ。早く読んだ方がいいんじやねえかな」

「まさか」

（まさか！？）

俺は彼女の言葉に妙な感触を感じた。

（何があるのか）

心中でそう思つたが口には出さなかつた。そのまま手紙を取りに行く彼女を見送つた。

彼女はすぐに戻つて來た。そわそわした様子が今度は沈んだ様子になつていて。それを見ると俺は何かあると思つた。

「何の手紙だつたんだい？」

「両親から」

彼女は答えた。50

「この夏の後のこと」「

「戻つてからのことかよ」

「御免なさい」

彼女はそこまで言つて急に俺に對して謝つた。

「どうしたんだよ、一体」

「もうここには来れないの」

今にも泣きそうな顔でこいつ言つた。

「来れないって」

「ここに来るのは私じゃなくなるから」

「訳のわからなうこと言つたな」

それがどういう意味なのか本当にわからなかつた。

「どうこいつことなんだよ、それって」

「話せないの。けれど」

泣きそうな顔のまま言つた。その時の顔は今でも覚えている。

「この夏で。いいえ、今別れましょう」

「別れるってよ」

俺はさら訳がわからなくなつた。

「何言つてるんだよ、急に」

「さよなら」

けれど彼女は俺の言葉を遮つてこいつ言つた。

「楽しかったわ。けれど」

「さよならつておこ」

「今まで一緒にいてくれて有り難う、けれどもつ

「終わりなのかよ、それで」

「御免なさい」

彼女はそのまますりすりと涙を浮かべていた。何か俺が悪者みた

いな気になつてきた。

こんな田をされちゃ もつ俺にはどうすることもできなかつた。観念した。俺もその言葉を受け入れることにした。

「わかったよ

俺は言った。

「じゃあこれでお別れだな。じゃあな

「ええ

もう俺に顔を向けはしなかった。顔を背けて答える。

俺はそこからは何も言わなかつた。無言で彼女の別荘を出た。そのまま家へと帰つて行つた。どうにも腑に落ちるものじゃなかつたがそれで納得するしかなかつた。悔しいが認めるしかなかつた。急に夏が終わつた気がした。空も海もまだ青いのに俺の夏は終わつた。そう思うしかなかつた。俺はそれからはまたいつもの夏に戻つた。店を手伝つて適当に遊ぶ。そうして気ままに生きることにした。どうせあれば夢だつたんだ、そう思つて自分で納得することにした。けれどそんな俺の耳にふとあることが耳に入つて來た。

「ねえ聞いた？」

店の使いで道を歩いている時に地元の女子高生の話がふと耳に入つた。部活か何かの帰りだつたのだろう。夏休みだつてのに制服を着ていた。白いカッターとチェックのミニスカートから見える脚が日の光を跳ね返してやけにまぶしかつた。

「あそこの白い別荘だけれどね

（白い別荘！？） 9 2

俺はそれを聞いてまさかと思った。

「あそこにお嬢さんがいるよね

「ああ、あの黒い髪の綺麗な人ね

俺はそれを聞いて間違いないと思つた。そして耳を凝らした。

「何でも結婚するらしいよ

「へえ、そなんだ

（嘘だろ）

何とか表には出さなかつたが動搖した。すぐには信じられない話だつた。

「一の夏が終わったらすぐ」。それでもうすぐここから帰っちゃうんだってさ」

「そりなんだ」

「本当はずつと後で結婚する筈だつたけれど向一のつの事情があるうしくて」

「お金持ちの家だからね。許婚とかそんなのなのかな」

「多分ね。いいところのお嬢様らしいから」

「お嬢様つてのも大変よね」

「まああたし達にはお金を落としてくれるいい人達だけれどね」

「あはは、確かに」

そこまで聞いて俺には大体の事情がわかつた。だからあの時彼女は急に態度が変わったのだ。動搖して。急に別れ話を切り出したのもそれでわかつた。

「今日にもここを出るらしいよ

「また急ね」

「あたしもそう思つけれどね。まあそういう事情なんじゃないかな」

俺はすぐに店の使いを終えた。それが終わるとその足で駅に向かつた。自転車をありつたけ飛ばして駅に向かつた。線路が一本、プラットホームは一つの小さい駅だ。通る電車も少ない。けれどこの時ばかりはその電車が来ないことを祈つた。いつもは何時来るんだと舌打ちばかりしているホームなのに。俺は向かつた。

駅に着いた。自転車はそいいらに置いて駅の中に入った。そこには彼女がいた。

「どうしてここに」

俺の姿を認めて驚いた顔をしていた。あの白い服と帽子にトランクを持っていた。今にも去りうとする姿だった。

「話を聞いたよ

俺は笑みを浮かべて彼女に言った。けれどその笑みはきっと寂しい笑みだったと思う。自分ではわかりはない。

「結婚するんだってね」

「ええ

彼女は俯いた。そして小さい声で答えた。

「それもすぐに」

「そうよ」

それにも答えた。駅には俺達の他は誰もいなかつた。また一人だけの世界に戻れた。けれどその世界は今すぐにでも終わるうつとしているのはわかつていて。それを感じながら話をした。

「本当は。ずっとこれからのことだつたのに」

「許婚なんだってね」

「ええ

彼女はまた答えた。

「それ、俺に隠していたんだ」

「御免なさい」

「名前、変わるから。だから君じやなくなるんだね」

「今のは。もういなくなるから」

彼女は言つた。

「結婚するからだね」

「そうよ」

その声が段々濡れたものになつてきているのがわかつた。

「この夏が終わつたら。すぐにね」

「それまでの最後の思い出の為に」ここへ来たんだ

「そのつもりだつたけれど」

彼女は俯いたままだつた。けれどその言葉はよく聞こえた。

「貴方にお会つて」

泣きだした。俺はそんな彼女にいつの間にか泣いたのだ。

「馬鹿だね、泣くなよ」

泣くことなんてなかつたからだ。

「どんなことだつてや、終わりがあるんだ」

俺だつて辛くないと言ふば嘘になる。けれどこの時はそんなことは

我慢して言つた。

「だからさ、気にすることなんてないさ」

「優しいのね」

彼女は俺の言葉を聞いてその顔を少しあげた。

「騙してたの?」

「騙してたりなんかしてないじゃないか」

これは慰めじゃなかつた。俺の本音だつた。

隠していたのと騙していたのは違うよ」

「違うの?」

「そうだ。誰だってさ、言えないことがあるんだ」

この時それがわかつた。それがわかつたら何もかも終わるつてことも。

「だからさ、気にすることはないんだ」

「有り難う」

俺の言葉に礼を言つた。

「私なんかに。そんなこと言つてくれて」

「もうここには来ないんだりつへ」

「ええ

彼女は答えた。

「どうりでさう。ここ来るのはこれで最後にするつもりだったか

」

「そうか、じゃあこれでお別れだね」

「そうね」

まだ濡れたままの田でいつひつた。

「これで、永遠でよくなりなれ

「ああ

俺は彼女のその言葉に頷いた。その時後ろから電車が来た。

「これで。何もかもね

「そうね。夏ももつ」

電車は俺達の横で止まつた。扉が左右にゆっくりと開く。

「これに。乗るんだよね」

「そうよ」

彼女は電車に足を向けた。静かに片足をそこに踏み入れた。踏み入れたところで俺に顔を向けてきた。ゆっくりと声をかけてきた。

「さよなら」

「さようなら」

俺もそれに応えて挨拶をした。

「ずつとな」

「ええ、ずつと」

俺達は最後に見詰め合つた。出発を知らせるベルが鳴つた。彼女はその中に入つた。

扉がゆっくりと閉まつた。そして海から離ればじめる。俺はその電車をゆっくりと眺めていた。

もう終わつたと思った。この電車が消えれば俺の恋も青春も全部終わりだ。本当に一夏限りの夢だつた。そうなる筈だつた。彼女が出て来るまでは。

彼女が出て來た。窓から顔を出して。白いハンカチで俺に別れの手を振つていた。

「あいつ・・・・・・」

不意に俺の方が泣き出してしまつた。泣かずにはいられなかつた。俺は泣きながら彼女に手を振つた。最後の別れの為に。

そのままお互い手を振り合つた。電車が消えるまで。消えてからも俺は暫く手を振つていた。

振り終わつた時俺はわかつた。もうこの恋も青春も一夏限りの夢じゃなくなつたことに。

俺の一生の思い出になつた。辛いけれど、心地良い思い出に。俺みたいな奴でも恋や青春を味わうことが出来た。たつた一人の女人を心から愛せた。それのはじめて知つた。愛と哀しみをそこに一

緒に含んで。今そのラストショードが終わった。電車は消えた。そして彼女も。けれどそのラストショードは俺の心の中に永遠に残る。甘と辛を一緒にしたにして。

愛と哀しみのラストショード 完

2006・3・16

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9035a/>

愛と哀しみのラストショ-

2010年10月8日16時00分発行